

シリーズ この人に聞く 第7回

# 命とこころ、 希望のバトン

1940年 宮崎県生まれ。医師。長崎大学医学部卒業後、同大医学部附属病院第一外科助手を経て、同大熱帯医学研究所に所属。71年から73年、アフリカ・ケニアのリフトバレー州立総合病院に派遣され医療活動に従事。この時の体験をもとに友人で歌手のさだまさしさんが楽曲・小説『風に立つライオン』を作り、映画化され話題になる。現在は宮崎市の介護老人保健施設「サンヒルきよたけ」で施設長を務めている。



医師  
柴田 紘一郎さん



アフリカの子どもたちに、どんな未来が待っているのだろうか。写真は元気に遊ぶウガンダの子どもたち ©UNICEF/UGDA2015-00113/Wandera

## 医師を目指した幼少期

——幼少の時、なぜ医者を目指されたのですか。

僕は1940年の戦前生まれです。戦争中は敵機が来るのを避けるため疎開していました。5歳で終戦を迎え、もう敵機は来ない。何がしたいかと言ったら、遊びたい。終戦直後で何もないですから遊ぶ対象は自然で、最初に憶えたのは木登り。それから魚釣りをして遊んでいました。その頃に紙芝居がやってきた。今でいうアニメみたいなもので、『ターザン』やアフリカのジャングルで獣に襲われた黒人を助ける人の話があり、今思うとそれはアルベルト・シュバイツァーのことだったと思います。とても影響を受けて、「いつかできたらアフリカに行って、人助けをしたい」と思っていました。

——他に影響を受けられたという『少年ケニヤ』は子ども向けの絵物語ですが、根底には勸善懲惡、原爆など「生と死」がテーマになっています。

歌手のさだまさしさんの歌『風に立つライオン』で、僕はライナー（解説書）を書いています。その中に「人は生老病死（生まれる、老いる、病気になる、死ぬ）の4つの苦がある」と記しました。しかし、アフリカの現地の人は皆とにかく明るく前向きで、強く生きています。

——その後、長崎大学医学部に入学し、熱帯医学研究所に所属されます。

外科に入った理由は子どもの頃見た紙芝居のように、怪我

をした人を治したいと思っていたからです。「いつかチャンスがあれば、アフリカに行きたい。」ずっとそう思っていました。医学部を卒業して4・5年後、政府（当時はOTCA〔海外技術協力事業団〕現在のJICA〔国際協力機構〕）と大学とのプロジェクトでケニアのナクルに行く話がありました。教授が「誰か行きたい者はおらんか?」と聞きましたが、誰も手を挙げない。僕は行きたいけど、まだ医学部を卒業して5年目で経験不足だし、先輩もいるし……とって手を挙げられなかった。80～90kgも体重のある大きな先輩が、「教授はもし僕がライオンに襲われたら、責任とってくれるんですか!？」と聞いたりしていたんです。次週になっても誰も手を挙げず、決まらない。僕はとにかくアフリカに行きたいと思っていましたから、そこで手を挙げて「私が行ってもいいでしょうか?」と応募したんです。教授は「柴田君、行ってくれるか!君のような人を待っていたんだよ!」と喜んで下さった。願っていれば叶う。僕は運がいいんです。

## アフリカで外科医として奮闘

——それは願っていると同時に、先生がそこに向かって努力してこられたことが前提にあります。

長崎大学は、1960年代からアフリカでの医療支援活動を開始。柴田先生は71年から73年の2年間、ケニア西部の都市ナクルにあるリフトバレー州立総合病院に派遣され、医療器具も不十分という苛酷な現場で医療活動に従事されます。

当時のケニアには現地の医者は1人もおらず、インド人医師などと一緒に1年で2,000件以上、2年で5,000件くらいの手術にあたりました。救急が一番多いのは帝王切開が必要な妊婦さん。黒人の方は腰が大きく問題がないと思われるだろうけど、産道が固くて赤ん坊が出てこられない妊婦も多い。子宮が破裂したら胎児は死んでしまいますから、手術をして取り上げる。

今年のオリンピックを観ながら、ケニアの人は足が強い方も多く、ひょっとしたら自分が取り上げた赤ちゃんが大きくなり、その子の孫くらいが出て活躍してるんじゃないかなと思ったりしていました。(笑)

——ほかにマラリアやフィラリア症、交通事故の患者さんが多かったとか。

マラリアも風邪みたいなもので、熱が出たらマラリアとすぐ分かります。僕自身も怖かったので、「キニーネ」という予防の薬をナクル外に行くときはつねに服用していました。

ナクルは赤道直下で昼は太陽が真上から射してすごい日差しですが、住んでいるところは標高2,000mで夜は涼しく、蚊が出ない。でも飛行機で手術に行くような、少し緯度を下った場所だと夜でも暑くて蚊が出てくる。また夜は真っ暗で星がすごくきれい。数年前、映画撮影のために訪れたまさしさんもそう言っていました。

熱研はその後、病気の原因の解明と予防に力を入れるため、1979年よりKEMRI(ケニア中央医学研究所)とタッグを組んで活動を開始します。感染症、下痢や原虫などの研究を行い、現在まで半世紀以上の歴史があります。

病医院は現在300カ所くらいあり、外科は60カ所くらいに増えているようです。

## 命は神様からの大きなギフト

——先生が主人公のモデルとなった映画『風に立つライオン』では、現地での医療支援活動や少年兵との交流が描かれています。小説の中の一節には「医師が患者から奪ってはいけないものは命ではなく希望。希望は心の持ち物だから。」とあり、その言葉が胸に響きました。

あの言葉は好きですね。まさしさんがすごいと思うのは、そうした創作の部分だけでなく、話の中に出てくる病気の、例えばマラリアやフィラリア症でも、自分でインターネットで調べて書いています。僕は最終的には本の検閲をしましたが、最初には何もしていませんから。

講演などでは、よく「LOVE(愛)運動」のことを話します。言葉の意味は、「L」は「Listen=聞く」、「O」は「Overview=全体を見る」、「V」は「Voice=言葉」、「E」は「Excuse=許す」の大切さです。今は「Excuse=許す」が自分の中では大きい。今の世の中は余りにも許さな過ぎるというか、いいことなのかもしれないけれど、許さないと言う人が多く、許すことは少ない。

アフリカ時代、日本人に診てもらったということに感謝された。医療がうまくいかないこともあったけれど、患者さんは「ありがとう」と言ってくれた。今生かされている僕も、許されて生きている。少しは許すことがあってもいいのではないかな。

人は生まれてきたことが奇跡ですね。サムシンググレート(大自然の大いなる力)、この言葉ですね。生まれてきた命を何に使うか。目には見えない、神の大いなる使命が皆にある。命というのは1つの精子、1つの卵子が結びついてたくさん細胞が生まれる。人間は60兆の細胞からできていますが、その細胞1つひとつに神様から大いなるギフト、何か使命を授けてもらっている。お前はこう生きろよ、お前はこう生きろよ、という。サムシンググレート、目には見えない、何か分からないけど神様がくれたもの。それが僕たち皆にある。それをどうやって人に伝え、尽くしていくか。許されて生きている僕も、何か人のために生きていたい。

——この物語はたくさんの人の心に働きかけ、行動に移す現象が起きました。何かに心打たれても、実際に行動し体現していくことは、誰もがができることではないと思います。「人と人をつなぐ希望のバトン」という点で、先生もシュバイツァー等からバトンを受け取ったのだと思います。最後に子どもたちへメッセージをお願いします。

あなたは宝だよ。生まれてきた理由は自分では分からないだろうけど、何かの理由で生まれるべくして生まれてきた。この世の中で大切なものはなにもない。生まれてきたことは奇跡。生まれてきたことそのものに意味があるから、与えられた務めを遂行する道に行く。あなたが世界を創っていくんだよ。(聞き手・前田真子)